

■肢体不自由のある子ども・知的障害のある子どもへの実践事例

肢・知併置校における マルチメディアDAISY図書の活用

東京都立鹿本学園
本多桂子

はじめに

東京都立鹿本学園は、肢体不自由教育部門（小・中・高）と知的障害教育部門（小・中）、2部門5学部で構成される特別支援学校です。児童・生徒数は肢体不自由教育部門159名、知的障害教育部門273名、合計432名と大規模校であり、子どもたちの障害の状況は多様です。

本校は、2014年に開校してから、「読書活動の推進」を学校経営計画にあげ、読書環境の整備や読書週間など、子どもたちの意欲を高める取り組みを、全校一丸となって実践してきました。

その成果が認められ、2017年度「子供の読書活動優秀実践校文部科学大臣表彰」を受賞することができました。マルチメディアDAISY図書は、本校の読書活動の一端を担っており、言語能力の向上を目指した授業実践を展開する際の大きな力になっています。

2016年度までの実践

昨年度までは、肢体不自由・知的障

害両教育部門で、昼休みを利用し、マルチメディアDAISY図書を活用したお話し会（以下、DAISYキャラバン）と称し、大型テレビによる集団視聴を全校で展開しました。

肢体不自由教育部門は、司書教諭が各教室を訪れる巡回型で、知的教育部門は決まった場所で毎週開催する集会型で行いました。ソフトウェアは、個別の教育用ICTパソコンに、インストールして使用しました。（『わいわい文庫活用術⑤』p12、複数の学級で使用したい時の方法）

学習指導での活用例として、国語や総合的な学習で物語の読解や音読学習に使用する、百人一首の札を読む、「ひなぎく」というアプリを使用してDAISY図書を作成するなど音読学習に役立つ使用方法を実践しました。

これらの取り組みにより、全校の教職員への普及と啓発を進めながら、子どもたちの興味・関心を高めることができました。また、授業における個別や小集団での活用など、さまざまな場

面での活用方法を開発したことにより、活用の機会が増加しました。

2017年度の実践

本校では、共生社会を人々と協調し豊かにたくましく生き抜くことができる確かな学力と自信を身につけさせることを目標にしています。

文字・言語の獲得にいたる初期段階の指導から読書・発表にいたる段階的な指導を通じて、障害の程度・状態にかかわらず、言語の表現手段や文章表現の習得および思考力・判断力を伸長させるため、読書環境の整備、活用の拡大や言語能力の向上を重点に授業実践を行っています。

今年度も、全校ではDAISYキャラバンを継続し、教職員へ使用方法や作品の良さを伝え、普及と啓発に努めました。また、ネットワークハードディスクに保存し、どの端末からも視聴ができるようにし、使用方法のマニュアルや作品リストを作成しました。

個別や小集団での授業実践では、子どもたちの実態に合わせた使用方法を、検討していきました。今年度は、特に聞く読書として有効であった重度の障害のある子どもたちの授業実践を中心に報告します。

DAISYキャラバン

昼休みなどを利用した集団の活用例

①期間 7月～12月

②時間 給食前後の15分間

司書教諭の可能な時間帯

③形態 大型テレビによる集団視聴

肢体不自由、知的障害両教育部門ともに各教室を巡回し開催しました。視聴する際は、多様な障害の実態から、楽に見られる姿勢で行いました。視聴した作品は各年度のCDのなかから、子どもたちの実態に合わせて、司書教諭や学級担任が選択し、10～15分程度のお話の視聴を行いました。

④成果と課題

DAISYキャラバンは、両部門ともに、小学部低学年で大変好評であり、複数回開催する学級もありました。作品は10分以内のもので、授業などで読み聞かせをしていた作品は、特に喜んで見ていました。筋緊張が強く、車いすなどに座っていることが困難な子どもたちでも、リラックスした姿勢で視聴すると、表情豊かに見ることができました。

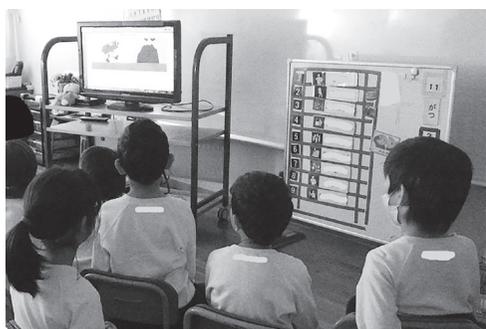
また、このDAISYキャラバンでは、司書教諭として、子どもたちの実際の視聴の様子や、教員による子どもたちの実態に合わせた姿勢の工夫や子どもたちへの言葉かけなどを、直接見ることができる大変貴重な機会です。

本校の子どもたちの活用にあたっての発達年齢に合わせた作品選びについて解説したり、初めて使用する教職員

に使い方を説明したり、おすすめの作品を働きかけたり、新しく購入する本の選書にも役立ったりしました。



肢体不自由教育部門



知的障害教育部門

ネットワークサーバーの活用

使用の増加に従って、個別に使用方法や作品についての問い合わせが、教員から出てきました。もっと使用しやすくするために、児童・生徒用のネットワークハードディスクに保存して、どの端末からも視聴できるようにしました。その使用方法のマニュアルと作品リストを作成し、全学級に配布しました。

これにより、ほぼすべての教室で全作品が視聴可能となり、各自教員が使

用したいときに使えるようになりました。その結果、積極的に使用したいと、作品リストや使用方法について、聞きにくる教員が増加しました。

しかし、集団視聴に必要な大型テレビ、パソコンの台数には制限があり、いつでも使用できるわけではないこと、使用するための準備は忙しい教員にとっては大変であることなどの課題も出てきました。

活用例 1

肢体不自由教育部門の中学部の自立活動を主とする教育課程の学習グループの国語・数学に活用した例です。

この学習グループの生徒は、好き、嫌いなどの気持ちを発声や表情で表現できます。授業で定期的にマルチメディアDAISY図書を使用し、繰り返しの楽しさや内容を理解して、表情豊かに聞いていました。

国語、数学の授業で『がたんごとん』を扱うときには、「乗せてください」「降りてください」「さようなら」などのセリフを意識することを目標に展開しました。ビックマック（VOCA）にセリフ録音して、お話のなかで、その言葉が出てきたら、自分でビックマックを押して、セリフを発声させました。

こうしたやりとりを通して、生徒が絵本の世界観を感じ、楽しみながら、見たり聞いたり、教員や友だちに伝え

たりする学習に活用しました。

生徒は授業が始まるとお話の内容を覚えていて、大好きな場面で歓声あげたり、ブックマックをタイミングよく押して、物語に参加できたことで、笑顔が見られたりしました。生徒の実態に合わせ、プラレールを導入で使ったり、複数のブックマックを使用したりするなど、他の教材を組み合わせ、マルチメディアDAISY図書を活用しました。



肢体不自由教育部門 中学部

活用例2

本校には障害が重く、通学が難しい訪問学級の子どもたちが10名在籍しています。週3回2時間の授業の中で、読書活動も活発に行っています。本校では、開校時から江戸川区立中央図書館の司書によるお話会を、年間18回程度開催しています。

このお話会では、学年などの小集団を基本に、季節の歌、本や紙芝居の読み聞かせ、学級担任のリクエストなどを取り入れた内容を実施しています。校内では申し込みがたくさんあり、大

好評です。訪問学級の子どもたちにとっては、なかなか体験することができないお話会ですが、今年度初めて、江戸川区立中央図書館の司書の方と、本校の司書教諭が家庭への訪問でのお話会を、夏季休業中に開催しました。その際に、マルチメディアDAISY図書の紹介も行いました。その後、iPadを2週間程度家庭に貸し出し、使用後に保護者へアンケートをしました。読み聞かせが大好きで、家庭でも積極的に読み聞かせをしてもらっている生徒でしたので、マルチメディアDAISY図書を使用しても、よく見たり聞いたりして楽しむことができました。

訪問生の保護者からは「1人で過ごす時に使用したい」「紙芝居形式の作品が増加してほしい」との意見がありました。障害の重い生徒にとっては、文字送りを見ているより、紙芝居形式で、絵を見ながらお話を聞くほうが落ち着いて見ていられることが多く、マルチメディアDAISY図書の有効性が保護者にも理解してもらえました。



肢体不自由教育部門 訪問学級

活用例 3

知的障害教育部門小学部の子どもたちが、国語・算数の授業で『コロッケです。』の作品を使用して、音読と読解の学習に活用した例です。

この学級の子どもたちはひらがなとカタカナを読む力に多少差があります。大型テレビを使用して、教員が何度か読み聞かせした後で、子どもに「コロッケはどこでしょう?」「コロッケはこの後どうしたでしょう?」「カラスと何を相談したでしょう?」という質問をすることで、コロッケを探したり、絵を見て次に何をしたか考えたりしました。

ロケットが出てくる場面では、自分がロケットになって教室を走る子どももいて、大変おもしろく絵本の世界に入ることができたようです。

絵本の内容を理解すると、字が読める児童は自分で画面を指差しながら、読みはじめました。友だちが読んでいると、1人2人と自分も挑戦してみたいと、読む児童が増え、大型テレビで友だちと一緒に読むことが大変嬉しい様子でした。

また、読み上げ音声を使用しなかったことにより、子どもの実態に合わせた活用ができ効果的でした。



知的教育部門 小学部

教員アンケートから

東京都教育委員会では、第三次東京都子供読書活動推進計画を策定し、都立学校を対象に児童・生徒の読書状況および各校における読書活動取り組み状況を把握し、今後の子供読書活動の推進のため、調査を行っています。

そのなかの児童・生徒の読書状況に関する調査を本校で独自に実施しました。その独自の校内調査で、パソコンなどのICTを使用した読書率は、紙の読書率95パーセントに対して、わずか6パーセントという結果でした。

そこで、今年度を含め、3年間のDAISYキャラバン隊によるお話会の有効性や授業による活用の実態、広まらない原因の追究とさらに拡大するための方法を探るために、全教員へマルチメディアDAISY図書についてのアンケート調査を行いました。

アンケート調査は、各学級に使用方法のマニュアルと作品リストを配布し、

DAISYキャラバンを行った後に、教員へ実施しました。

まず、驚いたのは13パーセントの教員がマルチメディアDAISY図書を「知らない」と答えたことです。思った以上の教員が知らなかったことは、まだまだ普及に課題が多いと感じました。

使用したことがある教員も35%とそれほど多いとはいえ、使用する教員が限られています。前述の校内調査による児童・生徒のICTでの読書率が6%であった実態を考えると、DAISYキャラバンやマニュアル、作品リストの作成配布したことは活用促進に有効であったと言えます。

また、使用の有無にかかわらず、ほとんどの教員は「授業に使用してみたい」「休み時間や給食準備時間などの1人で待っている時に使用したい」という意見があったことから、現在使用したことがない教員にも、積極的に働きかけることで広がる可能性を示しています。

実際に、視聴した児童・生徒の様子についても「楽しんでいた」「少し楽しんでいた」という意見が多く、操作も比較的簡単に行えたとの意見が多数でした。

ではなぜ広まらないのか。その原因には、大型テレビやパソコンの台数が限られていること、視聴のためにパソコンなどの準備が必要であり、児童・生徒の実態によっては、その準備が困難であることなど、さまざまな原因がわかってきました。こうした原因の1つ1つを丁

寧に解決していくことが活用促進につながっていくと考えます。

例えば、教員や学校介護職員への使い方説明会を開催したり、個別で使用しやすくするために、校内にある教育用iPadにソフトをインストールして活用したり、作品リストを作品時間や発達年齢別にしたりと工夫しながら、活用を促進させていきたいと思います。

おわりに

本校は読書活動に全校一丸となって取り組み、学校図書館を有効に活用して学習に取り組んでいます。その結果、どんなに重い障害があっても読書活動を楽しんでいる子どもたちがたくさんいます。

また、教員だけでなく、学校介護職員や保護者との連携で、読み聞かせをする機会が多くあり、読書することが当たり前前の学習環境にあります。読書は自分で読む、聞く、相手に読んであげる、そして読んでもらうという活動を通して、言葉の知識が深まっていきます。

障害などで普通の本では読書することが困難な子どもたちにとって、自分で読む、聞くことを体験できる電子図書は、本にかかわる極めて有効な機会だと考えます。これからも読書への子どもたちの興味・関心を高める有効な手段として、マルチメディアDAISY図書がより充実していくことを期待しています。